

# 風土



稲の花  
神蔵器

七夕や桂郎の来て銀次来て

花かけて白洲次郎の稲田かな

いなびかり稲の分蘖十重二十重

稲稔る鶴川村に三鬼現れ

明易き七畳小屋に蠅叩き

桂郎のいのち知らずや蛍飛ぶ  
塗干して一町五反稲の咲く  
亀鳴くや七畳小屋に徹夜の灯  
明け易き選句の音の一つして  
門を出て一人に多勢門火焚く  
稲の花たましひ一つ一つかな  
新しき花野に朝の来てあたり



# 竹間集

同人作品



墓洗ふ

工藤ミネ子

蝸の施設を囲み唄ひ継ぐ  
この先のことは思はず墓洗ふ  
墓洗ふ家より真水運び来て  
茄子馬に乗りしは吾子か傾ぎけり  
畝高く盛り夕ながし屋敷畑  
連れ歩く影の折れたる残暑かな  
飛行機雲東へ秋の雲となり

大花野

柴田久子

一塊となる牧牛や霧動く  
真つ暗な海へ踊の手を放る  
赤のまま供へてありし無縁仏  
竹伐つて灯のもれてゐる躍り口  
庭よりの出入りの多し花木槿  
もう急かぬ一本道や大花野  
新涼や空気の青きエコー室

風を聞く

中村洋子

立秋や西行峠に風を聞く  
花野行く胸の高さの中歩く  
流灯のこの世出て行く波の上  
盆の供華つまづきながら流れをり  
西瓜切る東西南北子の四人  
正面の鏡の中の汗の顔  
無人駅の長き待つ間や稲の花

遠花火

橋添やよひ

仏と水わかち八月十五日  
抄らぬ遺品の整理夜の秋  
流灯や夫引き止める術知らず  
藍染のランチョンマツトけさの秋  
病む人の筆跡さだか遠花火  
かなかなや玻璃百枚の農学部  
句作とは生きてゐること遠花火

西瓜

浅田 光代

一休寺納豆黒ぎつしりと秋暑かな  
蜻蛉のつるみて禪寺の真昼  
あんなひとゐたかな西瓜食べてをり  
水門に藻の流れつく孟蘭盆会  
地藏会につむり大きな男の子  
蟻蛸とぶ筋力まざとてのひらに  
虫の音の押し寄せてゐる非常口

流灯

柿沼 盟子

電話ボックス残る街角秋近し  
影に現れ日向に消えし黒揚羽  
屋上のウッドデッキや星涼し  
白日傘くるとまはし閉ぢにけり  
新涼や川風の研ぐ星増えて  
流灯の三つ四ついつか寄り添ひて  
地下道の深きに出会ふ秋の蝶

鱒雲

高村 令子

空の色湖へひろげて秋来る  
揚羽蝶大きな空を残しけり  
切れさうで切れぬ絆や鱒雲  
鯛や誰にも逢はぬ峡の径  
思ひ出は良きことばかり盆の月  
足萎えの夢に野を駆け明易し  
朝寒や夢の狭間に亡夫残し

竹間集作家特別作品

## 思ひ出港町

田村すゝむ

開港は安政六年鳥渡る  
秋潮を分けて水先案内船  
霧の中鷗を連れて出航す  
秋燕林火の巨船今日見えぬ  
鷗とぶ秋や水兵さんの歌碑  
秋日傘少女の像を袖囲ひ  
天高しマストを登る縄梯子  
そのかみの霧の米<sup>メ</sup>利<sup>リ</sup>堅<sup>ケン</sup>波止場かな

坂なして仏具屋通り照紅葉  
馬車道の十番館や蔦紅葉  
名曲の流るる秋の喫茶館  
銀杏黄葉広東四川と食べ歩く  
鰯雲流るる果ては相模灘  
鱸網は羽の休み場鰯雲  
逝く秋の港に三塔物語  
歩いてても歩いてても横浜の秋  
かごめかごめ港の正面秋夕焼  
鳥渡る沖を見てゐる少女像  
逝く秋の酒場身の上話など  
栈橋に逢うて別るる秋日傘

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

短夜や眠れぬこともよしとして  
弾けたき我のをりけり鳳仙花  
海風や山車の並びて前夜祭  
千年の秘湯 蛭の小宇宙  
ほうたるの少女の髪に来て点る

十井ゆう子

遥拝の向きにとまりし赤とんぼ  
なだらかな多摩丘陵や梨育つ  
つつぱり棒力尽きたる酷暑かな  
灼けて着く介護保険通知状  
星流る鎮守の杜のあたりかな

鈴木 庸子

星飛ぶやエジプト王妃の腕飾り  
灯火親し父のガリ版印刷機

クレオパトラ展

中嶋 陽子

完成のパズルを崩す夜長かな  
『折々のことば』読みぬる今朝の秋  
鬼やんま車の窓をノックして

奥田 茶々

流星やイルカが夢を見る頃か  
豆腐屋のラッパ聞こえぬ沙羅の花  
耳すます夫の歌声花野より  
登山靴踊りの輪からはみだせり  
かなかなやゆつくり暮れてゆく夕べ

岡 尚

風生まる残暑まばらな粟田口  
七夕の茶扇に利休百首かな  
鯛や日暮れをせかす豆腐売り  
柳刃の使ひごこちや初秋刀魚  
東林院出でくる僧に沙羅の雨



# 山城の夏

上辻 蒼人

地 続 き や 大 和 山 城 梅 雨 曇  
山 城 に 生 れ て 焙 炉 師 小 柄 な る  
口 下 手 も 個 性 と 思 ふ 額 の 花  
色 艶 も 良 かり 茶 畑 夏 芽 吹 く  
夏 の 霧 宇 治 茶 に 丸 み 付 け に け り  
茶 畑 の 向 か う や 淡 き 梅 雨 の 虹  
曇 天 の 光 の 似 合 ふ 蓮 の 花  
御 仏 を 観 想 窓 に 拝 す 朱 夏  
照 り 返 す 濁 り て を り し 蓮 の 池  
傘 差 し て 平 等 院 の 蓮 覗 く  
献 燈 は 春 日 灯 籠 苔 の 花  
後 背 は 雲 中 菩 薩 蓮 開 く  
夏 の 雲 膨 ら み い ま だ 半 ば 程  
神 刀 は 武 士 の 劍 梅 雨 湿 り  
宇 治 川 に み どり の 瀬 音 往 く ば かり

代8回桂郎賞俳句部門佳作

急流を又翻し夏つばめ  
鵜飼舟中止の案内舟に貼る  
紫陽花を覗きつ上る札所寺  
丸くなるやうに紫陽花包む風  
山城の水吸ひ上げて濃紫陽花  
額の花紅のあはきも又佳かり  
昼の月この世の極み紫陽花寺  
有難きかな高殿の涼しき日  
山鳩も囀し寺苑の七変化  
山の日を集めて青き額の花  
額の花小振りなりしも品有りし  
いつの間に止まりてゐたる塩蜻蛉  
老鶯の鳴くや山影差す辺り  
額の花せせらぎ隠しゐて響く  
山下る階なす青田青田中

◇特別作品◇

伊豆便り

吉永すみれ

現世の命は一つ初明り  
大旦天城連山威を正す  
初風の海群青に伊豆五島  
応仁の三嶋暦や今朝の春  
燕来る北条早雲館跡  
鳥帰る蛭ヶ小島の一本松  
太陽も風も海からつくしんぼ  
囀や江川屋敷にパン祖の碑  
夏つばめ一直線に相模灘

のうぜんの花咲く米國領事館  
法難の海に消えゆく大夕焼  
一葉散る北条八重姫願掛碑  
流人墓遠離の月を仰ぎけり  
ひぐらしやどちら向いても山ばかり  
曼珠沙華火を放ちたる一揆の地  
鷗猛る山を向き又海に向き  
冬の蝶橋なき川を渡りゆく  
日の光月の光に寒牡丹  
生きるとは重ねる別れ冬銀河  
年逝くやどこにも合はぬ鍵一つ

# 風土集



## 神蔵器選

三の丸二の丸本丸蟻の道 東京 中嶋陽子

炎天や百人番所の長廂

パステルの音楽堂や雲の峰

蛇口より小さき噴水生まれをり

総論賛成各論反対炎暑かな

キユーピツドの矢が放たれて流れ星 東京 奥田茶々

コンビーフの缶を巻き取る終戦日

国境のおそき両替星月夜

つつかけに小石はさまる残暑かな

顔の汗清記用紙を濡らじけり

とび石の一つ一つに秋のこ糸 川崎 永井千鶴子

働く手裏返しては汗拭ふ

天仰ぐ蟬の命は短かり

夏萩や夕日のとどく志士の墓

涼しさや鎌倉古道ほとけ道

七百年の古刹一本沙羅の花 神奈川 石井秀一

流されて来しままに石夏の果

雲の間に星見えてくる夜涼かな

柚子青し礼状朝の内に書き

襲ひたる疾さに去りぬ大夕立

イタリヤ 四句 八月や規制厳しきフレスコ展 横浜 安永圭子

秋思濃きミケランジェロの天井画

日本語の通じぬ夢に寝汗かな

青き空糸杉列なす花野道

独り身に有余の至福酔芙蓉

汗の嬰や蒸し饅頭さながらに 東京 川田好子

佃島の渡船場趾や蜻蛉とぶ

言ふまじき言葉のみこむ沙羅の花

トンネルを抜け初秋の海展く

行き行きて花野の果てやほとけみち  
歩荷もう見えなくなりし花野かな  
あれからのこれからのこと墓洗ふ  
川崎 鈴木 庸子

もう一度常口掃きて魂迎ふ  
読み返すことも供養や沙羅の花  
衛星が捉ふ首都の灯終戦日  
塩蜻蛉魔法をかけし昔あり  
五條 上辻 蒼人

二座三座横にも伸びて雲の峰  
燈花会や上眼遣ひの廬舎那仏  
雲の帯伸び切つてゐる残暑かな  
蛸の声澄みきりて日暮れ来し  
駅頭の影みな歪む大西日  
津山 生田 作

荒草に角立つ秋の日射しかな  
濡れ軍手引き剥がすとき秋の風  
寡黙なるをとこいきなり秋蚊打つ  
ただならぬ花の数なり白木槿  
朝顔や朝夕五時の庭手入れ  
南丹 南奉 栄蓮

闇の夜やそらは宴の花火刻  
菊花火揚がりしあとの匂ひかな  
弘法の謚号勅書や蟬時雨  
淡海はや処暑の稲刈り始まりぬ  
横須賀 平田紀美子  
農協の野菜売り場の草の市

いつもゐる人と思へり魂迎  
起きしなに水飲む八月十五日  
外房の車窓に続く稲穂かな  
新聞にくるむ干物や秋暑し  
遠き世の蓮の風吹く大和古寺  
大和 落合絹代  
姫路城のそびらの雲も秋めけり

昭和史の始めは知らず終戦日  
星涼し一と夜影絵とガムランと  
リピングは夫の領域灯火親し  
長き夜の先師憲吉全句集  
横浜 下山田美江  
カテール髓を熱くし秋寒し

寝台の身の丈走る神無月  
若年のききとり早し医師の秋  
ちちははの道は恋しき盆の道  
白々と独りの朝や茗荷の子  
横浜 館 泰生  
見廻せば茂りが見ゆるくらしかな

ひぐらしや人生疾くと終盤に  
新涼や施設の妻も和みをり  
里山を従へ峰雲のし上がる  
『百年の孤独』積まるる夜店かな  
川崎 豎山道助  
書架に置く『一握の砂』秋はじめ  
子規虚子の俳諧の火の涼しさよ